



模型を使った、原発の仕組みについての説明を聞くメンバー。私は右端。



防災センターでSPEEDI（緊急時放射能影響予測システム）について説明を聞くメンバー。私は左から2番目。

電源車、使用済み核燃料などいくつも不安要素が

新潟長野両県議などとともに柏崎・刈羽原発を視察

日本共産党の新潟県議、長野県議、柏崎市議、長岡市議などとともに13日、柏崎刈羽原子力発電所、BWR運転訓練センター、原子力防災センター（オフサイトセンター）、新潟県放射線監視センターを視察してきました。

私が柏崎刈羽原子力発電所を訪れたのは中越沖地震後二度目です。排気筒や原子炉建屋などの耐震補強工事がほぼ終わり、防潮壁など津波対策関連の工事が進められていました。7つある発電機のうち、5号機、6号機が稼働していて、このうち6号機の原子炉建屋、タービン建屋などを見て、東京電力社員から説明を聞きました。

稼働している原子力発電機を見たのは初めてです。核燃料を入れ替える天井クレーン、タービンを見て、その大きさにびっくりしました。発電していることを実感できたのは、タービン建屋で足元まで「ゴー」という揺れが伝わってきた時でした。

中越沖地震の際、使用済み核燃料保管プールから放射能汚染された水が海に流れ出た場所や火災が発生した3号機変圧器付近も見てきました。

今回の視察で改めて感じたのは、東京電力は依然として原発安全神話にしがみついているのではないかと、ということでした。

原発周辺の活断層の存在についての説明では、「原発の直下まで

このうち、原子力防災センターでは飯野晋所長から直接説明していただきました。同センターは柏崎刈羽原発から7キロのところにあります。この距離では、福島第一原発と同じように、重大事故が発生した時には機能しないのではないかと思います。

被災地の住民よりも先に米軍に情報提供したことなどで大きな問題となっている緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム（SPEEDIリスピーディ）に関しては所長に仕組みと運用について質問が集中しました。

今回の視察に参加した人たちからは、「津波対策をやれば大丈夫と事業者は考えているのではないかと。3・11前の仕事をそのままやって人が住み、事故が起きれば非常に危険だ。共同

活断層がのびている可能性がある」との地学研究者の指摘を無視していました。全交流電源喪失についても、新たに配備した12台の電源車などで対応できると説明していましたが、地震発生後、原発の構内の道路を通れる保障はありませんし、電源車の運転員を確実に確保できるかどうかもあやふやでした。

また、使用済み核燃料は原子炉建屋のプールに3年から5年保管しておき、その後、青森の処理センターで処理していくと説明していましたが、これとて、思うようにはいかないことは目に見えています。事業者の視野の中には政治の動きがまったく入っていないと思えました。

原子力防災センター、新潟県放射線監視センターは初めて訪れました。

を広げ原発ゼロの運動を大きくしていきたい」、「東電は原発の現場に原子力の専門家はいないといっていた。人間がコントロールできないエネルギーはやめ、自然エネルギーへ転換すべき」などといった声が上がっていました。



中郷区二本木にて撮影

災害救助法が適用された中郷区を16日、視察してきました。

自分の親でも聞いてみなきやわからないことがあるもんです。先日、母と一緒にお茶を飲み、布団に寝ていても寒いことがあるという話をしたとき、数十年前に母が火傷（やけど）をしたことを初めて教えてくれました。

「こっちの足だったかな、いや、こっちか」そう言っただけで母はズボンをまくり、火傷痕（やけどあと）を見せてくれました。体が小さい割に、びっくりするほど太い足。その左足には明らかに火傷とわかる痕がありました。

火傷は母がまだ若い頃のこと、それも私かすぐ下の弟を抱いて寝ていた頃のことと、いいますから五十数年も前の話です。湯たんぽを布団の中に入れていて、いわゆる低温火傷をしてしまったのでした。朝、起きたらひりひりして水ぶくれになり、風呂に入る時には、しばらくの間、手ぬぐいで火傷をした箇所をしぼって入ったそうです。いまでも火傷痕が残っているくらいですから、だいぶひどかったのだと思います。

母は、遠い彼方からたぐり寄せするように、私が幼かったころの記憶をいくつも語ってくれました。

そのなかで一番印象に残ったのは布団の話です。当時、稲を作っていたわが家には、二階があり、わらをすぐって出たクズを布団の中に入れて温かくする工夫をしていました。いわゆる「クズ布団」というものです。クズを入れたばかりのときはふわふわした布団になります。湯たんぽのような即効性はないものの、その温かさは人間の肌にとわりと合いました。母は笑いながら言いました。「おまんた、クズ布団作ってやると、その上で跳びはねちゃって……。大喜びだった」と。まあ、よく憶えているもんだと思います。

クズ布団は子どもだけでなく、母も祖父も使っていました。祖父・音治郎は自分の布団のなかに行火（あんか）も入れていました。熱源は炭です。当時、わが家は炭焼農家でしたので、行火に入れる炭は十分あったようです。

祖父は、わが家で一番暖房の効いた布団に入り、私より六つ年下の弟を抱いて寝ていました。どうして弟が「最高待遇」を受けていたのかはわかりませんが、祖父にとってはかわいくてしょうがなかったのでしょうか。ところが、祖父がかわいがついているにもかかわらず、一緒に寝ている弟は時々問題を起こしていました。寝小便をしようのです。

やわらかなクズ布団を濡らされたら、乾かすのはたいへんです。そこで祖父は考えました。クズ布団の上に広いゴムシートを置き、さらにその上に毛布を敷いたのでした。これなら被害は最小限に抑えることができます。ひよっとすると、私も寝小便をしたことがあるのかも知れませんが、ゴムシートの話も聞くのは初めてでした。

最近、わが家では母が電気行火、妻は湯たんぽ、私は布団乾燥機を使っています。乾燥機は寝る前にいっとき、電気のスイッチを入れておけば、布団を適度な温度に温めてくれます。ただ、布団に入ったばかりの時は幸せいっぱい気分になりますが、若い時と違って、明け方になったころの布団の冷たさにがまんできなくなりました。

私が子どもだったころ、冬場になると、父は出稼ぎに出ています。普段は縄ないやムシロ作りをやっていた母と祖父も、大雪になると屋根の雪下ろしや落とした雪の片付けでたいへんでした。母の火傷の原因は、こうした雪かまいでくたびれて、深眠りをしてしまったからでした。

原子力安全委員会分科会、安定ヨウ素剤の家庭常備を提言へ

新聞、テレビの報道によると、「原発事故発生時の被ばく対策見直しを検討している内閣府原子力安全委員会の分科会は12日、甲状腺被ばくを防ぐ安定ヨウ素剤を、原発から半径30キロ圏内の各家庭に事前配布することが有効とする提言案を示し、安全委は、今後予定している原発事故対応の防災指針改定に盛り込む方針」（毎日新聞）といます。

これは東京電力福島第1原発事故の際、ヨウ素剤を保管していても機能しなかったことを反省しての対応です。市議会で「安定ヨウ素剤は家庭常備を」と事故前から主張してきたものとしては歓迎します。上越市では現在、市立診療所、総合事務所など10箇所約14万錠の安定ヨウ素剤を保管していますが、服用前に放射性物質が到達してしまう可能性があります。今回の新方針が決まれば、家庭や学校、職場などに安定ヨウ素剤が常備されることになることと思います。

アンケート回答に10代の学生さんも

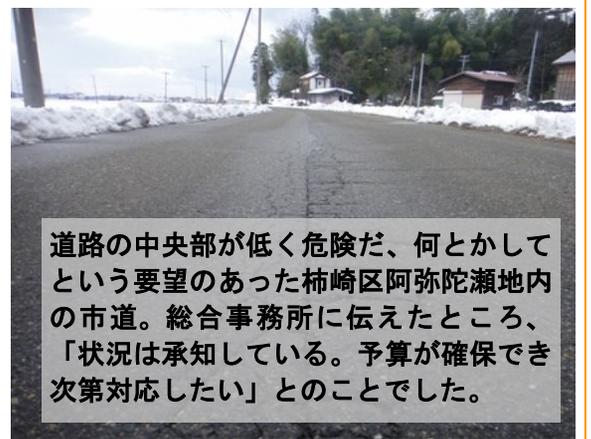
私が議員活動の一環として取り組んでいる市民アンケートへの回答が次々と寄せられています。「身の回りで何かお困りのことはありませんか」という問いに、「日曜のバス運行をしてほしい（山間部）。現状

ではタクシーなどで町へ出る手段しかないので困る」とありました。また、「増税反対を上越から進めてほしい」とも記載してありました。これは柿崎区の10代の学生さんからの声です。

身近な要望として多いのは市道整備、補修についての声です。大島区、柿崎区、吉川区などから寄せられています。こうした声は来月、まとめて市に提出する予定です。現在、こうした声については順次、現地調査を行い、行政側にも伝えるようにしています。

冬になっても「夏は来ぬ」

吉川区内などに流れる時報の音楽はいまも旧大潟町出身の小山作之助作曲の「夏は来ぬ」です。「冬になったらそれらしき音楽に変えてほしい。何となく寒々感じる」「季節ごと、あるいは夏と冬に変えていただければ楽しさが増すことと思います」という声が寄せられました。



道路の中央部が低く危険だ、何とかしてという要望のあった柿崎区阿弥陀瀬地内の市道。総合事務所に伝えたところ、「状況は承知している。予算が確保でき次第対応したい」とのことでした。